



Title	景行記の歌と散文（2）表現空間の解読と注釈
Author(s)	居駒, 永幸
Citation	明治大学教養論集, 534: (111)-(123)
URL	http://hdl.handle.net/10291/19856
Rights	
Issue Date	2018-09-30
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

景行記の歌と散文（Ⅱ）

——表現空間の解読と注釈——

居駒 永幸

八、白鳥翔天と御葬歌

【訓読文】

是に、倭に坐す后等と御子等と、諸下り到りて、御陵を作りて、即ち其地のなづき田 那より下の三字は音を以ゐる。
に匍匐ひ廻りて、哭きて歌為て曰はく、

なづきの田の 稻幹に

稻幹に 這ひ廻ろふ 野老蔓

(記34)

是に、八尋白ち鳥に化りて、天に翔りて浜に向きて飛び行きき。智の字は音を以ゐる。尔して、其の后と御子等と、其の
小竹の荻杖に、足跡り破れども、其の痛みを忘れて哭き追ひき。此の時、歌ひて曰はく、

浅小竹原 腰なづむ

空は行かず 足よ行くな

(記 35)

又、其の海塩に入りて、なづみ 此の三字は音を以ゐる。行く時、歌ひて曰く、

海処行けば 腰なづむ

大河原の 植ゑ草

海処は いさよふ

(記 36)

又、飛びて其の磯に居し時、歌ひて曰く、

浜つ千鳥 浜よは行かず 磯伝ふ

(記 37)

是の四つの歌は、皆其の御葬に歌ひき。故、今に至るまで、其の歌は、天皇の大御葬に歌ふぞ。

故、其の国より飛び翔り行き、河内国の志幾に留まりき。故、其地に御陵を作りて鎮め坐さしめき。即ち其の御陵を号けて白鳥御陵と謂ふ。然れども、亦其地より更に天に翔りて飛び行きき。

【本文】

於是、坐レ倭后等及御子等、諸人到而、作レ御陵、即匍^①匍廻其地之那豆岐田、自^②那下三字以音、而、哭為レ歌曰、

那豆岐能多能 伊那賀良迹 伊那賀良迹 波比母登富呂布 登許呂豆良

於是、化^③八尋白智鳥、翔^④天而向^⑤浜飛行。智字以音。尔、其后及御子等、於^⑥其小竹之荊杖、雖^⑦足跡破、忘^⑧其痛

以哭追。此時、歌曰、

阿佐士怒波良 許斯那豆牟 蘇良波由賀受 阿斯用由久那

又、入^⑨其海塩而、那豆美 此三字以音。行時、歌曰、

宇美賀由氣婆 許斯那豆牟 意富迦婆良能 宇惠具佐 宇美賀波 伊佐用布

又、飛居_ニ其磯_ニ之時、歌曰、

波麻都知登理 波麻用波由迦受 伊蘇豆多布

是四歌者、皆歌_ニ其御葬_ニ也。故、至_レ今其歌者、歌_ニ天皇之大御葬_ニ也。

故、自_ニ其国_ニ飛翔行、留_ニ河内国之志幾_ニ。故、於_ニ其地_ニ一作_ニ御陵_ニ鎮坐也。即号_ニ其御陵_ニ謂_ニ白鳥御陵_ニ也。然、亦自_ニ其地_ニ更翔_レ天以飛行。

【校異】 (1) 底本、「制」。龜頭古事記・訂正古訓古事記による。(2) 底本、「是」。卜部系諸本による。(3) 底本、「退」。卜部系諸本による。(4) 底本、「阿」ナシ。卜部系諸本による。(5) 底本、「波」ナシ。卜部系諸本による。

【現代語訳】

水に浸かった泥田の稲の茎に、その稲の茎に、這い延びて絡まっている山芋の蔓よ。

(記 34)

背の低い小竹の原は、小竹が腰にからまって歩きにくい。空は飛んで行けず、原を足で歩いて行くことよ。

(記 35)

海を行くと、腰まで波に浸かって歩きにくい。広い河原に生えている水草、その水草のように、海辺ではゆらゆら漂って前に進めない。

(記 36)

浜の千鳥は、浜辺を行かずに磯伝いに行くことよ。

(記 37)

【語釈】

倭に坐す后等と御子等 倭建命の「崩一(死)を伝える「駆使」の派遣を受けて、倭にいる后たちや御子たちが能煩野に下向したことを言う。この部分の後・御子たちの叙述は、31歌の「命のまたけむ人」「髻華に挿せ その子一から読み取れる叙事と対応する。倭建命が思国歌で思慕した人たちが弔うのである。

御陵 延喜式諸陵寮に「能哀野墓 日本武尊 在伊勢国鈴鹿郡」とある。現在、三重県亀山市の能褒野王塚古墳がその墓に比定されている。ただし、これは明治十二年、宮内省による治定である。この古墳は全長約九〇メートルの前方後円墳で、四世紀末の築造と推定されている。その位置は畿内周辺地域の勢力が濃尾地方に進展するルート上に当たるといふ。倭建命の人物像が皇族將軍の複合したイメージだとすれば、倭王権による東国進出という記憶の中で、能褒野と倭建命が結びついたとも考えられる。

なづきの田の 稻幹に 稻幹に 「なづき」は動詞ナツクの名詞形。新撰字鏡に「漚 漬也 漸浮也 清也 奈津久 又比太須 又宇留保須也」とある。「なづきの田」は水に浸かった泥田のこと。足をとられてもがく様を表す。記紀歌謡評釈は「深田」とする。「海石に 振れ立つ なづの木」(記74)の「なづ」は海水にひたって漂う木の意である。記傳は「靡附たる田」で御陵の周囲の田とする。古代歌謡全注釈・古事記編も類聚名義抄の「脇ナツキ」を引いて御陵のかたわらの田の意とし、野老は山地のものゆえ水田ではなく、「陸田」「渠」であろうとするのは、后・御子たちの難渋する所作という歌の叙事を見ない実体的解釈である。よく引き合に出される出雲国風土記・出雲郡の「腦 磯」「腦 島」も海水にひたる意で通じる。散文では「那豆岐田」が歌の音仮名と同じ表記で、歌に基づく記述となっている。イナガラは稻の茎。

日本書紀・神代上の「粟莖」に古訓アガラがあり、倭名類聚抄には「稻 牟岐如良 麦莖也」とある。

這ひ廻るふ 野老蔓 厚顔抄は「蔓廻」「野老葛」とし、「稻ニハヒマハリタル野老ノツルノ如ク、悲シミニ堪スシテハ

と臥タマフ事ヲ喩ヘタマフ」と解する。「野老」は山芋の一種。倭名類聚抄には「薺」を「土古呂」と訓み、漢語抄に「野老」とも書くことを記す。万葉歌の「冬薯預葛ところづら いや常とこしくに」（7・1133）はトコを起こす序、「冬菽預都良ところづら 尋め行きければ」（9・1809）はトメユクの枕詞であって修辭として用いられる。トコロは長い蔓を辿って根茎を掘り、苦みの少ない冬に食することから、「冬」字を用いる。「這ひ廻ろふ」は他に絡みつくトコロの植物生態を言う表現であるが、山地性のトコロが水田の稲茎に絡みつくことはないとする指摘は妥当でない。「なづきの田」と「這ひ廻ろふ」は后・御子たちが倭建命の直身に会えずに悲嘆し、それでも会おうとして難渋する行為を暗示する。その行為は、万葉集の高市皇子殯宮挽歌に「……大殿おほとのを 振りふりみつつ 鶉うづらなす いは這はひもとほり 侍まじへど……」（2・199）とあり、従者たちが亡き皇子の宮殿を這い回って戸惑う様子に通じる。古事記注釈はこの部分を哀哭の殯宮儀礼における祭式的所作と見るが、新編全集古事記では陵墓を作るとあるから当たらないとする。后・御子たちが御陵の地の泥田に這い回って泣くという散文は、歌詞の音仮名表記「那豆岐」をそのまま用いていることからわかるように、歌から読み取れる叙事に基づく叙述である。古代歌謡全注釈・古事記編をはじめとする恋の民謡説は疑問と言うほかない。

八尋白ち鳥に化りて 大きな白い千鳥に変身して、の意。その鳥を倭建命の魂の姿と見なしている。両手を広げた長さが一尋だが、この「八尋」は実数ではなく、大きくて聖なる存在を表す。景行紀に「日本武尊化ニ白鳥ニ、從レ陵出之、指ニ倭国ニ而飛之、仲哀紀に「父王既崩之。乃神靈化ニ白鳥ニ而上レ天」とある。岩波古典大系古事記は「白ち鳥は、白い千鳥の意か。チは格助詞ツの転音で白ツ鳥即ち白鳥の意か明らかでない」とするが、記傳が「波麻都知登理ハマツチトシリとよみ給へる哥につきて、推オシて此レ白鳥ヲを白智鳥イハと呼ベる」と指摘したように、第四歌（記37）による記述と見てよい。この世ならざる鳥、すなわち神靈の姿である。古事記の「化」は上巻に二例、中巻に六例あり、すべて神あるいは神靈の変身に用いられる。

小竹の荊杞に、足跡り 「小竹」は歌詞のシノハラによってシノと訓む。万葉歌に「近江のや矢橋の小竹を矢はがずて」(7・一三五〇)「池の辺の小槻が下の細竹な刈りそね」(7・一二七六)とあって「小竹」「細竹」と表記され、新撰字鏡に「籐竹也細竹也篠也志乃又保曹竹」、倭名類聚抄に「篠 和名之乃一云佐々 俗用小竹 謂之佐々 細細竹也」とある。「篠」の字も用い、ササとも呼ばれた。『萬葉植物新考』によれば、約三メートルに達するネザサを中心にヤダケの類もシノと呼んでいたらしい。「刈杞」は刈り取った後の切株。「躰」は、おうふう古事記(修訂版)に爾雅の釈言「躰、刖也」の郭璞注にある「断足也」を引いて、刑の一種である「躰」を用いるのは断足の刑に匹敵する苦痛を表すとす。古事記注釈はそうした字義との関わりを否定するが、この散文は歌詞「浅小竹原 腰なづむ」の叙事を断足の刑に擬えて解釈したと見られる。「其の痛みを忘れて」は白ち鳥(倭建命の魂)を追う行く后・御子たちの苦痛の大きさを表す。

浅小竹原 腰なづむ 「浅小竹原」は背の低い小竹の原。ナツムは類聚名義抄に「泥 ナツムトドコホル」「阻 ナツムトドム ハバムナヤム」とあり、腰がひかかって滞る意。万葉歌の「三宅の原ゆ ひた土に 足踏み貫き 夏草を 腰になづみ いかなるや 人の児故そ 通はす我子」(13・三二九五)は、切株を踏んで足を傷つけ、夏草に腰を絡まれながらも恋人のもとに通う息子をうたった歌だが、原の歩行は難渋するイメージでとらえられていた。しかし、恋の通い路の発想だからといって、短絡的に恋の民謡として散文から切り離すことはできない。

空は行かず 足よ行くな 「空は行かず」は空は行くことができず、の意。「足よ」のヨは手段を表し、「行くな」のナは詠嘆で、足で歩いて行くことよ、の意。白ち鳥は空を飛んでいくのに、自分たちは浅小竹原を難渋しながら歩いて行くのと嘆く。万葉歌の「安蘇の川原よ石踏まず空ゆと来ぬよ」(14・三四二五)は類似するが、こちらは川原を歩かずに空を飛んできたよと、一刻も早く逢いたい気持ちをうたう。「空は行かず」の歌詞が白ち鳥となって一天に翔りて」という散文叙述を生み出す。白ち鳥を難渋しながら追う行く后・御子たちの所作に意味がある(解説参照)。

海処行けば 腰なづむ ウミガは海の場合を表す。記傳は「陸リキに對ひて、海を宇美賀ウミガとは云なり。共に賀ガは、處コの意」で、住所スミヤカなどのカと同じとする。「腰なづむ」は腰が海水に浸かって進まない状態を言う。この歌詞によって「海塩に入りて、なづみ行きし時」の散文が叙述される。

大河原の 植糸草 「大河原」は川のほとりではなく、大きな川の水面や水中を指す。大海原と同じ言い方。「植糸草」は人が植える草ではなく、自然に生えている水草のこと。記傳は「此二句は、譬ヘにて、大河原の殖草ツクサの如く伊佐用布イサヨフとつゞく意」とする。

海処は いさよふ 水草のように漂って進まない意。イサヨフは月・雲・波に用いて漂う意を表す。一山の際キにいさよふ雲クモ (3・四二八)「山の端はにいさよふ月」(6・一〇〇八)など、万葉歌の例がある。后・御子たちが海で「なづむ」様子は水草のように「いさよふ」所作とも表現される。

浜つ千鳥 チトリは多くの鳥と水辺に棲むチドリ科の鳥の二つの意味があるが、ここは浜辺を歩き回る千鳥を指す。万葉歌に詠まれた佐保川の千鳥はイカルチドリのようであるが(東光治『萬葉動物考・続編』)、河口から海浜に生息し、普通に見られるのはシロチドリである。日本書紀に「沖ウミつ藻モは辺ヘには寄ヨれどもさ寝床ネトコも与タはぬかもよ浜ハマつ千鳥チトリよ」(紀4)の例がある。歌詞の「知登利」に基づいて散文の「白智鳥」が生み出された。

浜よは行かず 磯伝ふ 「浜よ」のヨは動作の通過・經由する場所を表す格助詞。ヨリの古形。浜は海岸の砂地、磯は岩場で海岸とは限らないが、ここでは海辺の岩の多い波打ち際を指す。新撰字鏡に「涓 水澄也 波万又伊曾」「瀆 水涯也 水支波又伊曾 又波万」とあり、水辺の二様を指す語として浜と磯があった。その二語を対照的に示し、浜の千鳥が歩きやすい浜辺を行かないで、歩行し難い岩場を行くことだと、白ち鳥を磯伝いに難渋しながら追行く行為がうたわれる。この歌にナツムの語はないが、前のナツムの歌二首(記35、36)と同じく難渋する様の表現で一貫する。磯はその先が海

原で、后・御子たちがもう追いかけれない場所としてうたわれている。

皆其の御葬に歌ひき この四首の歌(記34～37)は倭建命の「御葬」すなわち埋葬を中心とする葬送の時にうたわれたと記す。それに対して古代歌謡全注釈・古事記編は、御陵に葬った後の歌を葬送の歌とするのは矛盾だと指摘する。新編全集古事記は「ここは、あらためて河内国の御陵に葬する時に歌われたと受け取るべきもの」と解する。しかし、四首の歌の後に「その国(伊勢国)より飛び翔り」て河内国に留まるとあるから、ここでは倭建命の能褒野墓埋葬から御霊(白ち鳥)を追いかけるところまでが「其の御葬」と見なされている。后・御子たちの追いかける行為によって倭建命の魂が他界に鎮まることを記述する意味があった。

天皇の大御葬に歌ふぞ 四首の歌が後の天皇の葬儀でうたわれる由来を記す。大御葬歌とはなっていないので、歌曲名の書き方ではない。記傳はこの四首がうたわれる理由について、倭建命は「天皇に准奉る」だけでなく、大功を立てて旅中に死し、白鳥と化すなど尋常ではないからだとし、これらの歌は「殊に優れて悲哀さの甚深き」と述べている。ところが、この四首は日本書紀にない。天皇葬歌の起源を倭建命に求める点に古事記の意図がうかがわれる。

河内国の志幾 倭名類聚抄に河内国志紀郡志紀郷とある。大阪府柏原市周辺。景行紀四十年是歳には白鳥が倭の琴弾原に留まったことを記すが、古事記では大和国を素通りする。これは大和国を思慕する思国歌と照応しない。この点について、「天皇の世界から離れた倭建命を象徴している」(新編全集古事記)とする見方がある。白ち鳥の飛翔は白鳥御陵の造営を語る文脈としてある。大和国の外部にあって天皇の宮がある大和国を守護するという意識とも考えられる。

白鳥御陵 白鳥陵の所在地は羽曳野市軽里。景行紀では能褒野陵から白鳥が飛び出て倭の琴弾原、河内の古市邑に留まって陵を造ったことにより、その三陵を白鳥陵と称する。続日本紀の和銅二年八月条には「震倭建命墓」とあって白鳥陵の名はなく、いずれの御陵とも決めがたい。河内国志幾の倭建命墓が古事記では歌による物語化によって白鳥御陵と

名付けられたことになる。

更に天に翔りて この「天」は単に上空の意ではない。白ち鳥は地上とは異なる空間に飛び去ったことを示す。それは景行紀の「然遂上_レ天」とも呼応する。后・御子たちの追いかく行為によって、最後に倭建命の魂が天上世界に鎮まったことを叙述するのである。この一文に、白ち鳥をめぐる歌と散文によって何を語るのかという古事記の意図が端的に示される。

【解説】

大御葬の歌四首の実体については、早くに童謡説（高木市之助『吉野の鮎』昭和16年）があり、その後、歌垣でうたわれた恋の民謡を天皇葬歌に転用したとする見解（土橋寛「古代民謡解釈の方法」『立命館文学』昭和26年2月、「倭建命御葬歌の原歌」『説林』昭和26年5月）が出された。恋の通い路をうたう民謡（吾郷寅之進「倭建命御葬歌の原義一・二」『国学院雑誌』昭和41年2月、3月）とするのもそれに近い。その他、農業祭に関わる呪歌（吉井巖「倭建物語と呪歌」『国語国文』昭和33年10月）や民衆の労働歌（神堀忍「歌謡の転用」関西大学『国文学』昭和34年7月）という見方もある。いずれも本来は独立の歌謡とする立場である。

このうち有力なのは恋の民謡説であるが、それがなぜ倭建命の死をうたうことになったのかという疑問に対して古代歌謡全注釈・古事記編は「物語述作者は、多くの歌垣の歌の中からあの四首を選んで靈魂鳥の物語を述作した」と説明した。しかし、倭建命の死に無関係の、しかも恋の民謡を結びつける創作が果たしてあり得たのかどうか、きわめて疑問である。この四首は倭建命の死をうたう葬歌として成立したと考えるべきであろう。

日本古代に葬歌はなかったとされている（土橋寛『古代歌謡の世界』）。しかし、記・紀や万葉集に例がないからと言っ

てその存在を否定することはできないだろう。死を穢れとして忌む古代的観念からすれば、記録に残らなかった可能性が高い。むしろ、この四首は古代葬歌の希少な例と言える。それらは死者の魂を追いかう表現であり、他界への鎮まりをうたう歌であった。

この表現は万葉挽歌の様式にもなっている。例えば、柿本人麻呂の河島皇子挽歌に「袖交へし君 下垂の 越智野 過ぎ行く またも逢はめやも(2・一九五)、同じく泣血哀慟歌に「羽易の山に 我が恋ふる 妹はいますと 人の言 えば 岩根さくみて なづみ来し」(2・二二〇)とあるのは、亡き近親者に逢おうとして追いかう、しかし逢えないことにより、他界への鎮まりを確かめるのである。この挽歌表現は古代的世界観に基づくものであり、葬歌からのつながりと見られるであろう。

倭建命の葬歌にもどるが、この四首は「場所+なづむ」という構造をもつ。歌の配置で言えば、「なづき田」「浅小竹原」「海処」「磯」というように、境界に接する場所がうたわれている。他界とつながっている場所、あるいは他界に近づいていく場所と言ってもよい。そのような境界の場所において追いかう者たちのなづむ所作がうたわれる。四首目の「磯伝ふ」もなづむ行為と見なしてよい。それらは倭建命の死を悲しむ后・御子たちの姿であり、二首目からは倭建命の化身である白ち鳥を追いかう行為としてうたわれる。

最初の「なづき田」から次の「浅小竹原」へ、その移動は人間世界から離れていくことを表す。さらに「海処」と最後の「磯」は人間の住む領域から遠ざかり、他界とつながる空間を意味している。それぞれの歌にうたわれた境界の場所は、人間世界から他界へ向かう道筋として位置づけられている。他界との境界ゆえに、死者を追いかう者は行きなづむのである。それは死者を他界へと送り遣る行為であった。こうして死者はこの世との境界を越えて他界へと送り鎮められると考えられた。

境界の場所は后・御子たちが倭建命の魂である白ち鳥を追いかく道筋である。それは同時に、死者自身がそれらの場所をたどって他界へと去る様子をうたっていることにもなる。死者が他界へ去ることと近親者が死者を送り鎮めることが重なり合っている。倭建命の大御葬歌は、倭建命の魂が境界を越えて他界へ去ることをうたうのである。境界の場所は呪的な意味をもつが、それをうたう歌の呪力によって、征討の帰途に死すという特別な位置にある倭建命が大和国の王権の側から鎮魂されることになったわけである。

倭建命の死がこれらの四首の歌そのものによって伝えられたことは疑いない。それらは倭建命の死と鎮魂をうたう葬歌として成立した。倭建命の魂が白ち鳥と化し、天に翔り去って行くという散文叙述は、四首の歌の叙事によって生成してくるものである。歌の叙事の理解において白鳥翔天の物語が成り立つのである。

九、景行記の歌と散文

景行記に景行天皇の目立った事績はない。美濃国の姉妹を召し上げるために大碓命を派遣させる話、食事に出てこない大碓命に対して弟の小碓命（後の倭建命）に教え諭させる話、兄を残酷に殺した小碓命を恐れて熊曾建征討を命じる話、倭建命に東方十二道の征討を命じる話に登場するのみである。つまり、景行記は倭建命に一元化する歴史叙述の方法をとっている。

古事記全体から見ると、景行記は崇神記とともに天皇支配の版図拡大とその確定という位置にある。崇神記では三皇子の地方派遣であったものが景行記では複数の皇族將軍による征討を倭建命に集約した形である。日本書紀では西征の景行天皇と東征の日本武尊に二分されるが、古事記では倭建命一人の英雄的な活躍として記述するのである。倭建命の

名辞からして大和の勇者という集約的一般名称である。古事記には倭建命の少年時代から英雄的な死まで一代記のスタイルで書かれることになる。

見逃してならないのは景行記の冒頭にある系譜記事に、

八十王之中、若帯日子命与倭建命、亦、五百木之人日子命、此三王、負_二太子之名_一。

と明記することである。その系譜には三人の内最初に倭建命の名を挙げ、以下、後に成務天皇となる若帯日子命、弟の五百木之人日子命の順に記される。しかし、天皇に即位すべき三人の中でもっとも有力な倭建命は、天皇になることはなかった。倭建命は仲哀天皇の父であり、景行記末尾に載る倭建命の系譜は天皇に匹敵する分量である。この系譜記事の事実について景行記は明確な意図をもってその経緯を説く必要があった。そのことが景行記において倭建命に焦点をあてて一代記風に、しかも歌と散文によって劇的に記述する理由であったと考えてよい。倭建命の系譜、および歌と散文の物語は景行記と成務記のあいだにあるもう一つの天皇記だったのである。

そこに記された歌は十五首、一人の人物に関わる歌としては仁徳天皇に次いで多く、死の場面だけで八首の歌にのぼる。歌数を見ただけでも天皇の扱いをしていることがわかるのだが、その歌と散文において倭建命は特別な位置づけがなされている。まず、弟橘比売の「さねさし」の歌(記24)は、「其の後の歌ひて曰はく」とあって、倭建命は天皇の立場で后とともに東征を成し遂げたことが強調される。その入水死は倭建命の窮地を救う、まさに妹(后)の力を示すものにほかならない。解説に述べたように、「さねさし」の歌の叙事は相武国造の征討、弟橘比売の入水(走水海の神の鎮撫)、足柄坂の神の征討という三物語を結びつけ、そこに后との恋物語を重ねるものであった(「景行記の歌と散文(一)」『明治大学教養論集』二〇一八年三月)。東征の前半は倭建命が天皇の資格で后とともに和平を実現していく。その叙述の方法は「さねさし」の歌を軸に散文を構成するところにあった。

東征の後半には景行記の意図を明示する歌語が出てくる。「高光る 日の御子」「やすみしし 我が大君」(記28)である。これは尾張での祝婚の場で美夜受比売が倭建命に答えた歌であった。古事記は二つの称句を倭建命に対して最初に用いている。この称句は天照大御神の子孫としての「日の御子」と国土の八隅まで統べ治める「大君」という天皇像が倭建命を起源とすることを意味する。古事記は明らかに倭建命に天皇像の始祖的な位置を与えている。

景行記の歌と散文に示された古事記の意図は、先に述べた倭建命の特異な位置と符合する。倭建命が三人の太子の人、つまり日継の御子でありながら天皇に即位できなかったこと、その系譜が子の仲哀を経て中巻最後の応神、下巻最初の仁徳へと続いていくこと、この特異性の説明を古事記は必要とした。倭建命が后とともに東征をする天皇像と結びつくのは「さねさし」の歌においてであった。古事記は「さねなし」の歌を通して倭建命を天皇と同等に記述するのである。天皇統治の版図を確定し、仲哀以下の天皇の始祖的な位置に立つ倭建命の存在を明示するのも、「高光る 日の御子 やすみしし 我が大君」の歌であった。倭建命系譜の特異性を景行記の歌と散文において説明するという意図が古事記には明確にあったことになる。

それは景行記に一貫して、「嬢子の」の歌(記33)をうたい終わって死を迎えた時の「崩」は天皇にのみ用いる字であった。その崩後、后・御子たちが作ったのも天皇に用いる「御陵」である。「崩」「御陵」の用字意識はそのまま大御葬の歌(記34〜37)にも続く。倭建命の葬歌は今に至るまで天皇の大葬でうたうとするのである。そこには倭建命を天皇と同列に扱う意図があり、さらには倭建命に天皇の始祖的な位置を認める意識である。倭建命物語の歌と散文がその系譜の特異性に対応する関係で叙述されていることは疑いが無い。